

夏 休 み 企 画 展
dreamscape
う た か た の 扉



夏 休 み 企 画 展
dreamscape
う た か た の 扉

2013.8.3(Sat.) - 9.16(Mon.) Kyoto Art Center



大西康明：垂直の隙間 ／ Yasuaki Onishi : vertical emptiness







大西康明

- 1979 大阪府生まれ
- 2001 筑波大学芸術専門学群卒業
- 2004 京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了

日常的な素材を用いながら、目に見えない現象や気配をとらえて造形化させた作品群を制作。近年は、何らかの〈かたち〉を模った半透明のシートを黒い接着剤によって吊り下げるという手法での作品を多く手がけてきた。国内のみならず海外でも精力的に展覧会を行っている。本展では、そこから新たな展開を見せ、時間の経過、あるいは何かの始まりをも暗示させるようなインスタレーション作品を発表する。主な展覧会としてグループ展「agorá - Miniartextil」(Villa Olmo, Como, イタリア, 2012)、個展「Inner Space」(The Wilfrid Israel Museum of Asian Art and Studies, Hazorea, イスラエル, 2012)、グループ展「世界制作の方法」(国立国際美術館, 大阪, 2011)、個展「体積の裏側」(愛知県美術館, 名古屋, 2011) など。
<http://onys.net>

Yasuaki Onishi

- 1979 Born in Osaka
- 2001 B.A. Sculpture Course, School of Art & Design, University of Tsukuba, Japan
- 2004 M.A. Sculpture Course, Graduate School of Art, Kyoto City University of Arts, Japan

[selected exhibitions]

- 2012 agorá - Miniartextil / Villa Olmo, Como, Italy
Inner Space / The Wilfrid Israel Museum of Asian Art and Studies, Hazorea, Israel
- 2011 Ways of Worldmaking / The National Museum of Art Osaka, Osaka, Japan
reverse of volume / Aichi Prefectural Museum of Art, Nagoya, Japan

〈うたかたの扉〉が開くとき

眩い日差しや、夏衣の軽やかさが人々を活動的にさせるのだらうか。夏は、独特の開放感に満たされる季節である。そして、ルーティーンな日常から抜け出すことが出来る〈夏休み〉は、夏という季節の魅力に加え、やがて終わりの来てしまう限りある期間だからこそ、いっそう特別なものに感じられる。〈夏休み〉が近づくにつれ、いつもと違う何かが待っているような気がして心躍らせた記憶を、おそらく誰もが持っているのではないだろうか。行ったことのない場所に訪れる場合はもちろん、特にそういったことがなくても、見慣れたはずのものにも違った表情を見出したりして、〈夏休み〉には、まだ知らない世界に続く道があちこちに延びている。そしてこの夏、京都芸術センターにも、日常のとなりにある未知の世界への扉が二つ、開かれた。

—

ギャラリー南 | 大西康明「垂直の隙間」

部屋に入るなり目に飛び込んでくる白い造形物。逆さに吊られた木の枝から、何物かが地面まで垂直に落ちている。その隙間から仄見える黒い壁。まずはこの圧倒的な光景に目を奪われることだろう。近づいてみると、地面に向かって落ちているそれが、そして木から地面までが、繊細な無数の結晶で覆われていることがわかる。

大西康明は今回の展示で、黒い接着剤でポリエチレンシートを吊って何かの形を模するという近年の作品手法ではなく、そこから発展した新たな表現に挑戦した。ホワイトキューブだけれど、かつて教室だった面影も何となく残る特徴的な空間である京都芸術センターのギャラリーに、尿素の結晶を用いた白い光景が広がる。木の枝から地面まで垂れ落ちた半透明の接着剤に、尿素の飽和水溶液を吹き付けたものだ。これまで、地面から浮き上がっている、もしくは浮き上がる造形物を数多く手がけてきた大西だが、今回は接着剤が完全に地面まで落とされている。そして、その上を結晶で覆うことで、地面とのつながりはより強調されている。木の枝が吊られることで提示される〈逆さまの世界〉と、現実の世界とを埋めるこの結晶という素材は、大西にとってコントロールできない〈現象〉を象徴する。この〈現象〉

と、木の枝を吊るし、その枝に接着剤をからませて地面まで落とす、という〈行為〉。あるいは木の枝の有機的な曲線と、垂直に落ちる接着剤の描く直線。結晶の白と部屋の奥の壁一面に貼られたパネル作品の黒。〈逆さまの世界〉という非日常と、我々がいまここに立っている日常世界。幾重にも折り重なるコントラストが、この作品のタイトルである「垂直の隙間」に見え隠れしている。

壁面のパネルもまた、大西にとって初の試みとなる大型平面作品である。黒い接着剤で表面を塗り、その上からグラファイトの粉末で覆う。さらに、熱を加えたブルーガンの先で表面を引っ搔くことにより、光沢を帯びた表面から再び黒い接着剤の色を出現させたり、表面についた凹凸の中を彷徨いながら、黒い接着剤を新たに付着させたりといった〈行為〉の痕跡を残す。そして、またその上から熱を加えて痕跡を溶かすという〈現象〉を発生させる。ここでもまた、大西は〈行為〉と〈現象〉の間を行き交っている。今回の作品が過去作から大きく変化したのは、単に新しい素材を使用したというだけではなく、日常のなかで起こる目に見えない現象を可視化するという〈行為〉の産物としての作品から、〈現象〉そのものをも作品に内包している点にもある。これまでにもさまざまな素材を用い、その可能性を追求してきた大西。彼は、もはや素材と向きあうだけでは飽き足らず、関心を次の次元に進めつつあるのかもしれない。尿素の飽和水溶液が生む結晶は湿気で不安定になる。崩れてしまうかもしれないという危ういかなさと、力強い表現との絶妙なアンバランスが、空間に広がる光景の非日常性を増している。

—

ギャラリー北 | 松澤有子「つむぐ」

京都を訪れるのは修学旅行以来、と語る松澤有子は、今回は関西で初の作品発表となる。これまで、アーティスト・イン・レジデンスや様々な地方の芸術祭などで、行く先々の歴史や文化、人々の暮らしなど、その土地で彼女自身の感じたことを作品に落とし込む、というスタイルでの作品を発表し続けて来た。展覧会に向けてのリサーチで初めて京都芸術センターを訪れた松澤は、この地域がかつて呉服店の立ち並ぶ問屋街として栄え、町衆が京都芸術センターの前身である明倫小学校を建

てたということを知り、この土地や建物にまだその活気が残っているのを強く感じたという。また、階ごとに形の違う窓や、手すりや壁面など至る所にみられる凝った建築意匠に表れた京都人の〈粋〉に感激したそうだ。そこで、夏着物の紵や紗の透け感を表現して葉脈を素材に使うことを決めた。初めは織物、とりわけ帯をモチーフとした展示を想定していたが、準備を進めていくうちに、京都の地に刻まれた歴史や文化に触れ、京都人の「全ては見せないけれど、さりげない心遣い」こそ自分が京都で表現したいことだと気づき、プランを大きく修正した。

まず作品の核となる、宙に浮かんだように見える彩色された葉の設置が終わると、松澤は照明を慎重に、時間をかけて設営した。暗い展示室の中で、全てがすぐには見えないように、目が慣れてくることで見えるものが少しずつ増えていくように。それは、京都に入っればばらくして、京都のことが少しずつ見えて来た松澤自身の姿にリンクする。松澤が自らの肌で感じた〈京都〉を、時系列に添って追体験するかの如く、鑑賞者は彼女の作品を観る。明るいグラウンドに面した部屋に入ると、明暗のギャップに一瞬何も見えない。しばらくすると見えてくる幻想的な光景。色とりどりの透ける葉脈が宙に浮かび、風にゆらゆらと揺れている。白い葉脈が壁を照らす光に向かって床一面に並んでいるが、目が慣れてくるまではほとんど目に見えない。光源がどこにあるのか、彩色された葉脈の群れが何故浮かび上がるのかもわからない。想像しながら空間を眺めることこそ、松澤のねらいなのである。

—

白と闇。理論と感覚。二人の作品はまさに対照的でありながら、不思議に共通点がみられる。展示空間にひとたび足を踏み入れると、確かに日常と非日常の境界線がほんの少し揺らぐような感覚に陥ること。また手法、表現の仕方は違えど、いずれも繊細で美しくはかないこと。そして何より、展覧会の会期が終われば幻のように消えてしまうということ。そしてそれは、夏という季節が持つ特別感とリンクする。そんな「うたかた」の世界が、2013年の〈夏休み〉に確かに存在したことを、暑い京都の夏のまばゆい光とともに記憶の中に留まり続けることだろう。

藤田瑞穂

(京都芸術センター アート・コーディネーター)

夏休み企画展
dreamscape — うたかたの扉

会期 2013年8月3日(土)―9月16日(月・祝)
会場 京都芸術センター ギャラリー北・南ほか
出展作家 大西康明・松澤有子

主催 京都芸術センター
企画 藤田瑞穂(京都芸術センター)

撮影 大島拓也 (P.1-7, 12-13) 、サカタヤスノ (P.10-11, 14-16)
発行日 2013年8月20日
発行 京都芸術センター
〒604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2
tel:075-213-1000 fax:075-213-1004
http://www.kac.or.jp
E-mail:info@kac.or.jp

© 京都芸術センター 2013
※無断での転載転用は固くお断り致します。

dreamscape — La porte de l'écume

August 3rd - September 16th, 2013
Kyoto Art Center North Gallery and South Gallery
Artist: Yasuaki Onishi and Yuko Matsuzawa

Edited and Designed by Mizuho Fujita, Kyoto Art Center

Photo by Takuya Oshima (P.1-7, 12-13), Yasuno Sakata (P.10-11, 14-16)

Published by Kyoto Art Center
Yamabushiyama-cho 546-2, Nakagyo-ku, Kyoto 604-8156 JAPAN
tel: +81 75-213-1000 fax: +81 75-213-1004
http://www.kac.or.jp
E-mail: info@kac.or.jp

© Kyoto Art Center 2013
ALL RIGHTS RESERVED.

松澤有子

1975 神奈川県逗子市生まれ
2003 ウェスタン・シドニー大学芸術学部卒業
2006 シドニー大学芸術学部大学院修士課程修了

その土地の風土や場所の性質を活かし、まるでその場に生命が宿ったかのように非日常空間を生み出すインスタレーションを各地で制作。「制作はいつもその土地、その空間、そこに存在する時間や記憶に寄り添うことから始まります。そして作品は、そこからさらに紡いでゆこうとする過程の積極的な残像です」と語る。本展では、京都芸術センターの建物に眠っている記憶を呼び覚まし、過去と現在を「つむぐ、つなぐ」をテーマにインスタレーション作品を発表する。主な展覧会に、「つづく」(徳島LEDアートフェスティバル, 2012-2013)「ひかりを仰ぐ」(黄金町バザール, 横浜, 2011)、「来訪」(中之条ビエンナーレ, 群馬, 2011)、「千年」(あいちアートの森, 佐久島, 2010)、個展「この大きな水瓶のなかで」(POLARIS☆THE ART STAGE, 鎌倉, 2010)、「enishi」(越後妻有アートトリエンナーレ, 新潟, 2009) など。
<http://yukomatsuzawa.com>

Yuko Matsuzawa

1975 Born in Kanagawa
2003 B.A. Fine Arts, University of Western Sydney, Australia
2006 M.A. Visual Arts, Sydney College of Arts, Australia

[selected exhibitions]
2012 Tsuzuku / LED Arts Festuval, Tokushima, Japan
2011 Hikari wo Aogu / Koganecho Bazaar, Yokohama, Japan
2010 a thousand year / Sakushima Project, Nishio, Japan
in this big water jar / POLARIS☆THE ART STAGE, Kamakura, Japan





